

## 一八七〇年代および八〇年代のドイツ労働運動の構造（中）

小林, 栄三郎

<https://doi.org/10.15017/2329136>

---

出版情報 : 史淵. 88, pp.1-29, 1962-07-30. 九州大学文学部  
バージョン :  
権利関係 :

# 一八七〇年代および八〇年代のドイツ労働運動の構造（中）

小林 栄 三 郎

## 四

さきに述べたエルンスト・エンゲルベルククの「一八七八——一八九〇年の革命的的政策と赤い野戦郵便」は、巻末の付録に一八八七年における機関紙「ゾツィアールデモクラート」の發送表をかか<sup>(1)</sup>けている。社会主義鎮庄法によつてドイツ社会民主党が弾圧された時期に、この機関紙はスイスで印刷されて秘密にドイツへ送られた。一八八八年四月にスイス政府はドイツ政府の要請で、編集長エードゥアルト・ベルンシュタイン、配布主任ユーリウス・モッテラーほか二名を追放したので、そのうちロンドンで発行される。この發送リストはアムステルダム「社会史国際研究所」所蔵のモッテラー遺稿にもとづいてエンゲルベルクがつくつたもので、ドイツの一一七カ所について三カ月毎に發送部数と代価を記載している。（ゲルリッツ Görlich とシュトゥットガルトはそれぞれ二分され、たとえば Görlich I, Görlich II のように分けて記されている。）エンゲルベルクは地名のアルファベット順にしているが、私は發送部数の多い順にその一部をあげてみよう。一期、二期というのは I. Quartal および II. Quartal のことで、一年を三ヶ月毎に四期に分けて決算してい

一八七〇年代および八〇年代のドイツ労働運動の構造

る。ここでは価格は省略して発送部数だけを記す。

	一期	二期	三期	四期
ベルリン	一二八五	一四二五 (四月、五月)	一五二五	一六五〇
ハンブルク	七六五	七八六	七八六 (七月)	八四〇
ライプツィヒ	八〇〇 (二月)	八四〇	七三〇	五八〇
ドレーズデン	八四〇 (二月、三月)	四〇〇	四〇〇	四〇〇
ブラウンシュヴァイク	三三五	三三五 (四月)	三一五	二八五
ヘムニッツ	二五五	三〇五	二九〇	二九〇
ハノーヴァー	三一〇	二八〇	二四〇	二二〇
フランクフルト	三一〇	二七〇	二二〇	二〇〇
カルク (Kalk)	一八〇	一八五	一八五	一八五
ケルン	一八一	一七一 (四月、五月、六月)	一七一	一八一
ハルレ	一〇五	一二〇	一二〇	一二〇
ブレームン	一一五	一一五	一一五	一〇五
ケーニヒスベルク	一〇〇	一〇〇 (四月、五月、六月)	一一〇	一一〇
マクデブルク	六〇	二六〇 (四月、五月、六月)	一二〇	一二〇
フォルスト (Forst)	一〇〇	一〇〇	九二	九二
ミュンヘン	九〇	一〇〇 (四月、五月、六月)	一〇〇	一〇〇
シュトゥットガルト I	三一	三五	四〇	四〇

シュトゥットガルトⅡ	五三	五三	五三	八五(十月)
エルバーフェルト	八〇	八〇(四月)	九〇	九〇(十一月、十二月)
ノヴァヴェス (NOWYEGS)	六七(二月、三月)	七二(四月、六月)	七〇	一〇〇
キー	八〇	八〇	八〇	六九
ツヴァイッカウ	六三	七二	七二	七二
ゲ	六三	六四	六四	六五(七月、八月、九月)
リンバッハ	六〇	六〇	六〇	六〇
オッフエンバッハ	六〇	六〇	六〇	六〇
ブレスラウ	八四(二月、三月)	八〇(四月)	一	六〇(十二月)
ゲルリッツⅠ	一一	一一	一一	一一
ゲルリッツⅡ	五〇	五〇(四月、五月、六月)	四〇	一
カールスルーエ	四五	四五	六四	七〇
エルフルト	五五	五五	五五	五〇(十月、十一月、十二月)
クリミッツェウ	一	六四	六〇	六五
マインツ	五三	一	五〇	六五
ニュルンベルク	四六	四七	四七	四七
アウクスブルク	四五	四五	四五	四五
カッセル	三五(二月、三月)	五〇	四五	四五(十月)
ルートヴィヒスハーフェン	五〇	五〇	四〇	四〇

一八七〇年代および八〇年代のドイツ労働運動の構造

一八七〇年代および八〇年代のドイツ労働運動の構造

クレフェルト	三二(一月)	五二(四月)	一	二一
リューベック	五二(二月、三月)	五五	六〇	一
ハルブルク	三五	三五(四月)	三七	三七
ブランデンブルク	三九	三七(五月、六月)	三一	三一
シュプレンベルク	三六	三六	三六	二五
ダルムシュタット	三〇	三五	三五	三五
ワイマール	三六	三一	三一	三〇
アルテンブルク	三二	三二	三二	三二
ハシユテット	三〇	三〇	三〇	三〇
ドルトムント	二七(二月、二月)	二九	二九	二九
マンハイム、ミュラー	三一	三一	三一	二九(十月、十一月)
ブラウエン	三三	三三	二五	二一
フェルテン (Velken)	三〇	三〇	三〇	三〇
ロシユトック	三〇	三〇	三〇	三〇
シユテッティン	三六	二六	二〇	三〇(十月、十一月)
ヴォルフエンビュッテル	三〇	三〇	三〇(七月、八月)	二〇
コットブス	二八	二八	二八	二八
デュッセルドルフ	二六	二七(四月)	二八	二八
ハーナウ	二五	二七(五月、六月)	二五	二二
ヴェルツブルク	二〇	二五	二五	二五

フェルデン (Verden)	二一	二一	二一(七月、八月)	二五
ア ーヘン	二二	二二	二四(九月)	二〇
フレンスブルク	一九	一九	一九	一九
ゴ ー タ	一七	一七	一八	一八
エ ッ セン	二一	一五	一五	一五
リークニッツ	一五	一五	一五	一四

以上は一一七カ所のうち約半数の六二ヶ所だけをあげたのであるが、エンゲルベルクがいつているように、この機関紙の分布図は当時のドイツ社会民主党の組織と影響力とをかなり忠実に反映したものと見てよい。この分布図からエンゲルベルクは、労働運動の伝統がどんなに大切であるか、それのないところではいかに社会構造が革命的労働者党に好都合なものになつていてもそれだけで自然発生的に革命的精神が生まれてくるものではないことを強調する。(Es zeigt sich also, dass die Tradition der Arbeiterbewegung eine grosse Bedeutung hat und dass aus einer für eine revolutionäre Arbeiterpartei günstigen Sozialstruktur nicht spontan der revolutionäre Geist entsteht.) その証拠としてエンゲルベルクは、かつて共産主義者同盟 (der Bund der Kommunisten) の活動したケルンや、ラッサール派およびアイゼナッハ派が一八六〇年代に活動した都市および地域が社会主義鎮圧法の時代に党の強い地域になつてゐることをあげる。ラッサール派の拠点だつたベルリン、ハンブルク、ベルク地方 (das Bergische Land)、フランクフルト・アム・マインはこのときも社会民主党の重要な拠りどころであつたし、アイゼナッハ派の中心地たるザクセンおよびブラウンシュヴァイク地方は今も大きな役割を演じている。これに反して、社会構造の点からいうと社会民主党の影響力がはるかに一段と強いはずのルール地方やザール地方および上シュレージエンが、一八八〇年代にはそうなつていない。このような

働運動の伝統という要素とともに、エンゲルベルクは社会民主党を支持した労働者の社会経済的性格 (der sozialökonomische Charakter) をも考慮に入れる。この点は本稿の(上)で彼の所説を紹介したのでここでは重複を避けるが、ルール地方、ザール地方およびシュレージエンにおける事情が社会民主党に不利だった理由として彼はつぎのように述べている——この三地域は一八五〇年代によく近代工業の中心地に発展したので、これらの地方に定着したプロレタリアートは強度に波動的な鉱山労働者プロレタリアートおよび工場プロレタリアート (ein stark fluktuierendes Bergarbeiter- und Fabrikproletariat) であり、かれらは、中小経営にはたらく手工業的に修業をつんだ職人・労働者のばあいに見られるような専門的修練にかんする自覚も十分にもたず、また確固たる労働者意識も身につけるにいたっていない。さらに、数こそすくないが経済的に強力な大経営者たちは、多数の中小工場主と比べてはるかに有効な経済的ならびに経済的圧迫を労働者にくわえた。また教会、とくにカトリック教会の影響が、階級意識の発達にたいして異常な阻害的作用をおよぼした。なお機関紙「ゾツィアールデモクラート」の分布図から改めて痛感されるのは、ドイツの東部および北部の農村地帯をいかになはだしくエンカーが支配し、農業労働者の運動をさまたげることができていたか、ということだ——と。<sup>(2)</sup>

たしかに労働運動の伝統の有無は、こうした問題について考慮に入れるべき要因の一つであろう。かつて革命的労働運動のおこなわれたところは、それだけ新しい運動を受けいれる素地が残っているわけだから。しかしわれわれは伝統を過大に評価してもなるまい。それほど伝統があつても社会構造が変われば運動の条件がうしなわれていくことは、本稿のはじめに見たようにエンゲルスのすでに指摘したところである。<sup>(3)</sup> いずれにしてもエンゲルベルクが強調したように、一八七〇年代および八〇年代においてはまた、運動の最も活発な担い手は中小工業の熟練(修得)労働者 (die gelehrten Arbeiter in der Klein- und Mittelindustrie) であつたことは事実であらう。もろろん、このばあいにもエンゲルベルクは

ささかその点を力説しすぎた嫌いがある。大経営の労働者もこの時期に或る程度まで動いていることは、本稿の(上)でかえりみたっておりだから。それにしてもこの七〇年代および八〇年代に最も活躍したのは、一定の徒弟期間を終って職人になったり、あるいはさらに親方となつても事実上は賃労働者にすぎないような労働者層であつた。秘密にドイツへもちこまれる「ゾツィアルデモクラート」紙を三カ月一マルク五〇プフェニヒあるいは一マルク七〇の予約価<sup>1)</sup>で購読する人びと、露見すれば所罰されることを覚悟のうえで買う人たちの大部分は、おそらくこのような労働者層であつたと思われる。

一八七〇年代および八〇年代のドイツ労働者諸層の問題を考えるためには、ゲッツ・ブリーフスのプロレタリアート階層区分論が参考になる。これは一九二六年に書かれたもので、一八七〇年代および八〇年代だけを対象としたものでなく、第一次大戦後の状況までも念頭においたものだが、ドイツのみならずイギリスその他の国々の労働運動をふまえた考察で、今日でも教えられるところがすくなくない。それによると——最もひろくおこなわれる労働者の階層区分(Schichtung) はゲレルンテ・アルバイター (gelente Arbeiter)、アンゲレルンテ・アルバイター (angelente Arbeiter)、ウンゲレルンテ・アルバイター (ungelemte Arbeiter) の三分法である。ドイツの社会政策協会がドイツの重要産業部門について出したデータを見ても、そこから全労働者のなかの差異をあきらかにする理念的なものをとりだすことが可能となる。(一) ゲレルンテ・アルバイター。これはたいいてい都市の出身で、何年もの修業期間 (Lehrzeit) を経ており、おおむね終生その職業にとどまり、程度の差こそあれ自分の職業への誇りをもっている。かれはしばしば勤務先を変える。若い時分にとくにそうである。このゲレルンテの多くは経営内で高い地位へ上昇するか、あるいは免や労働組合または協同組合の役職者になる。このように自分の将来について何らかの上昇を予期する点こそ、ゲレルンテが他の二つのカテゴリーと根本的にちがうところである。ゲレルンテの賃金は(第一次大戦末期などの非常時を除けば)ウンゲレルンテの



それよりいちじるしく高かった。死亡率や疾病率も低い。またその家族は一般に少人数である。妻や娘が産業労働者としてはたらくということも、わりに稀れた。そこでは、自分の子供をなるべく賃労働から、すくなくとも肉体労働から脱出させようとする努力が支配している。生活様式や態度においてもゲレルンテは、アンゲレルンテやウンゲレルンテの人びととちがつている。ゲレルンテは、組織に入っているかぎりでは、職能別組合 (Berufsverband) に傾く。もし社会主義者であれば、修正主義的思想傾向を好む。アルフレット・ヴェーバーによると、この工場ハントヴェルカー (Fabrikhandwerker) ともいべき人びとのあいだには「職能リズムと生活リズムとの一致、そして労働からくる生活内容のほんとうの (あるいは可能的な) ゆたかさ」がまだ保持されていた。この労働者タイプは、すべての発達した工業国に見られる。イギリスではとくに、古い労働組合 (Trade-Unions) の組合貴族 (die Gewerkschaftsarisokratie) がそれである。かれらは閉鎖的傾向 (Abschliessungstendenzen) と賃金協約の政策をもっている。アメリカでは A・F・L やいわゆる「クラフト・ユニオン」に結集している人びとがそうだ。ゲレルンテの特色は、非中央集権的 (dezentralisiert) 組織を好むところにある。このゲレルンテこそ、ドイツにおける職能別労働組合 (Berufsverband) の中核体であり、またイギリスでは、しばしば分裂した古いトレード・ユニオン (Trade-unions) の主要構成分子であった。そしてアメリカでは、かれらは A・F・L の内部にあつて、かれら自身の職能別組合のために広範な自主性 (アウトノミー) を確保してきた。

(二) アンゲレルンテ・アルバイター。いわゆる養成工で、彼らは近代的な産業技術と分業との産物だ。この近代的技術および分業はいろいろの労働任務を大量につくりだす。こうした任務のためには完全な「オール・ラウンド (全工程) 修業」は不必要であり、かえって重荷にさえなる。かといつてズブの不熟練では務まらない。ここにおいて近代産業は養成工というタイプを自分で育成する。養成工はそれぞれ特殊の任務を仕込まれ、その任務のために専門化される。この仕込みは二、三週間か二、三カ月あればよろしい。こうして養成された工場専門家 (Fabrikspezialist) は、その修業と肉体

的あるいは知的モノレール化 (Einschienung) によって、そのおぼえこんだ任務にむすびつけられる。したがってゲレルンテのように自由に勤務先を変えるわけにいかない。かれらはワタリ (遍歴) をせず、自分の職能を変えることもほとんどない。アンゲレルンテにもいろいろのタイプがあるが、いずれも一定の資格をもつことでは共通していて、それぞれの職場での地位の重要性に応じてゲレルンテと同じような収入、同じような生活程度に高まり、それどころかもつと上にあえ上昇する。養成工は典型的な出来高払い労働者 (Akkordarbeiter) だ。それでも一般的にはブルジョア的生活への上昇の可能性は、ゲレルンテのばあいよりもすくない。(三) ウンゲレルンテ・アルバイター。あらゆる種類の補助工 (Hilfsarbeiter) 、日やとい労働者 (Tagelöhner) 、人夫 (Handlanger) がこれに属する。これらの不熟練工は主として筋肉労働に従事する。ハークナー (Herkner) のことばを借ると、かれらは主として「農村の住民のなかの最も下の、最も貧しい層から」出てきている。第一次大戦前では彼らのなかに外国人がかなり大きな割合で入りこんでいて、ドイツ人労働者のきらうような仕事についていた。一般に不熟練工は何か限定された固有の職能というものをもちないから、他の二つのカテゴリーのものほど場所や経営にしばられない。しかし、ゲレルンテに比べると勤務先を変える程度はすくない。かれらは主に日給ではたらき、その所得はゲレルンテやアンゲレルンテより低い。年令による選択は、ウンゲレルンテのばあいにはそれほどきびしくない。なにしろ収入がすくないから、妻や大きくなった娘も職場に出てはたらく。小さい子どもでも、家族収入をふやすためにかせぎに出ることが多い。こうした不熟練工が組織されるときには、産業別労働組合となる。しかし、すくなくとも第一次大戦前では、この不熟練工の大部分は未組織であった。ウンゲレルンテはラディカルな潮流の基盤である。戦後のドイツ共産主義やサンディカリズム、またイギリスのニュー・ユニオニズム、アメリカの I・W・W はこの層を主たる源泉としている。いわゆる「社会不安」の培養地はまさしくここにある——とブリーフスはいうのである。このブリーフスの所論を読みかえしてみても今日のわれわれは、すくなくとも第一次大戦までの、

あるいはさらに一九二〇年代までのドイツにおいて、いわゆるゲレルンテ・アルバイターすなわち何年かの徒弟期間を経たきた熟練（修得）労働者というものの占むる重要性がまた意外に根づよく大きいことも思い知らされる。

ゲルハルト・A・リッターがその「ヴィルヘルム帝国の労働運動」（一九五九年）のなかで、一八九〇年ごろのドイツ労働組合の重心は、有資格の専門工（die qualifizierten Spezialarbeiter）と手工業的伝統をもつ職人（Gesellen）すなわちゲレルンテ・アルバイターとにあつたというとき、その「有資格の専門工」は新技術の発見によって生まれてきたものとされているから、ブリーフスの分類に当てはめるとアンゲレルンテ・アルバイターの部類に属するものであろうが、非常に高度の専門技術をもつもののものである。たとえばキッド皮手袋工（Glacé-Handschuhmacher）、白なめし工（Weissgerber）、彫刻工（Bildhauer）、銅鍛冶工（Kupferschmied）、葉巻選別工（Zigarettsortierer）、石版工その他の印刷工がそれで、これらの人びとはストライキをしても代りがないほど高度の専門工だから、労働運動のために処分されても新しい職場を見つけやすく、お互いに旅行扶助の組織さえつくっているという。なおリッターは上記の手工業的伝統をもつ職人すなわちゲレルンテ・アルバイターについて、特にかれらが軽工業および完成品工業の工場にはたらいっているばあいを重視している。重工業の大経営のばあいには、経営者の組合圧迫と福利厚生施策、労働者の昇進可能性と信仰の差などによって、労働組合の組織化は特に困難であり、そのことは一八九四年社会民主党大会において、クルップ労働者としての体験を語ったHieの演説によつてもわかるからである。ウンゲレルンテ・アルバイターにいたつては、仕事の内容がしばしば変わるし、収入はとぼしく、ストをしてもスト破りでたやすく補いがつく。こうした事情で一八九〇年までは、まだウンゲレルンテ・アルバイターを組織化しようとする試みはほとんどすべて挫折した——とリッターはいう。なおリッターが一九〇四年の社会民主党大会の議事録によつて、ハンブルクのメー・デーの第一線に立つて示威行進をおこなう労働者の職種として建築工（Baumhandwerker）、靴工、仕立工、疾病基金職員などをあげていることは、格別に興

味ふかいものがある。<sup>(6)</sup> 一九〇四年にいたつてもなお、このような職種がデモの第一線に立っていたことは、一八七〇年代および八〇年代の労働運動の活動家構成を考えるうえにも示唆的である。

## 五

ヴィルヘルム・カイルの「或る社会民主党員の体験」(一九四七年刊)を読むと、一八八〇年代にロクロ工徒弟および職人であった著者の目を通して見た当時の情勢がかなりよくわかる。カイルは中部ドイツのカッセル市から東南一五キロほどの狭い谷間にあるヘルザ(Helza)という村で一八七〇年に生まれた。父は祖父から仕立工の職を修得していたが、石炭運送(Kohlenfuhrmann)を主たる職業としていた。ヘルガ村から南へ二時間ほどゆけるところに褐炭が出るので、それを馬車でカッセル市に運ぶわけだ。その子のカイルは一八八四年五月八日カッセル市のロクロ工親方(Drechslermeister)の徒弟となった。一八七〇年七月二四日生まれだから、一三才九カ月あまりである。徒弟期間は三年半で、住込み、食費無料という約束で、文書による契約はおこなわず、口約束だけだった。この条件は「全く良好」(recht günstig)であり、親方ゴットハルト(Gothardt)は三〇代のはじめくらいの年ごろで、堂々たる風采だった。ゴットハルト家は代々りっぱなブルジョアのロクロ工家族(eine alte, gutbürgerliche Drechslerfamilie)であるが、長男が家業の職を修得し、次男は家具工(Schreiner)を修得した。ところが長男は早世したので、次男があとを継いだ。かれはカッセル市第一の美しいロクロ工店舗(Drechslerladen)をもつていてその経営にはほとんど専念し、仕事場(Werkstatt)のほうには有能な若い職人(Geselle)がいて、とりしきっていた。かれはカイルの入門するすこし前に入ってきて、住込み、まかないつきで週三マルク五〇プフェニツヒをもらっていた。ここで製作するのは階段の横木や支柱、九柱戯の柱や球、いろいろの円柱、机や椅子の脚、そのほか家具のさまざまの付属物だった。また散歩用ステッキ、パイプ、葉巻パイプ、玉突き

玉、装身具などの製造や修理もする。材料はドイツ産の木材のほかに黒檀・象牙・琥珀・海泡石や動物の角も使われた。この親方の家はまかないが質・量ともに良好で、毎日肉があり、たまに肉のない日は夕食にソーセージが出た。昼食と夕食は親方夫妻と二人の職人と二人の徒弟がいつしよにする。仕事は夏は朝六時にはじまるが、冬は三〇分おそい。午後七時にはかなりキチンと終る。昼休みは一時間で、そのほかに朝食休みとコーヒー休みがある。ほかの多くの親方のところでは、まかないが悪くて徒弟は空腹に苦しむのに、ここではその点申し分なく、その他の条件も、寝室が狭くて採光・通風が悪いのを除けば、じつに良かった。一八八四年や八七年の総選挙については、それぞれの党がプラカードに大きな字でうたい文句を書いていたが、そのうちの一つに「プファンクーフ (Pfanckuch) を選挙せよ」とあったのをおぼえている。プファンクーフは社会民主党の候補者で、当時カイルはこの党については、ただそれが貧しい層の人びとの改善をめざすものであるということで、共感をおぼえていたにすぎない。そのころ社会民主党は一〇時間労働の法制化運動をしていたが、これは労働時間の長さを自分たちで決める「自由」を奪うものではないか、などという論法がまだハバをきかせていて、じつは労働時間の長さが使用者がわから一方的に決められているという事実には想いいたらなかった。労働組合的な組織は当時まことにすくなく、せつかく六〇年代および七〇年代に急速に発展しかけていたこれらの組織も、社会主義鎮圧法で社会民主党の政党組織とともに弾圧された。八〇年代のはじめには二、三の労働組合が再起をくわだてたが、警察の監視がきびしく、一部は政治活動をしたというかどで再び禁止された。ロクロ工という職業は職人の数がすくないので、労働組合が成立しにくく、カイルの徒弟時代にはカッセル市にロクロ工職人 (Drehtelergeselle) の組合はなかった。一八八七年十一月八日に徒弟期間が終つて職人になったが、それから二週間のちにそうした組合が設立されて、カイルもその創立に参加した。飲食店の小さい室に一八名ほどの仲間が集つて話し合い、ビールを飲んだ。毎月の例会には、カッセル市を去るまで一、二回出席したが、ビールを飲み、タバコを喫い、おしゃべりしたこと以外には憶えてい

ない。職人になつても他のことは変わらず、ただ固定給として週三マルクをもらうことになり、二、三週間のちに親方のほうから四マルクに上げてくれた。職人になつたばかりで週三マルクは高いとされていたし、四マルクというのはめつたになかった。カッセル市のロクロ工にはツンフト制 (Zunftverfassung) はとつくになくなつていたので、職人になるための職人作品 (Gesellenstück) もつくらず、職人試験も受けずにすんだ。たださまざまの職業の徒弟作品展示会があつて、カイルも徒弟になつて二年目の終りに梨材でつくつた喫煙具一揃いを出品した。

一八八八年三月三日にカイルはワタリ (die Wanderschaft) すなわち遍歴に出発する。まずハノーヴァー市におもむき、ロクロ工親方ヴィルトハーゲのところではたらく。こんどは住込みでなく、かれの兄が同じカッセル市にいて室を借りて朝のコーヒー一杯と小さなパン、夕方の茶一杯で週二マルク二〇払つていたが、カイルは若いといつたので週一マルク九〇にしてもらつた。仕事は朝六時にはじまつて一時間つづく。賃金は二週間後に決めることになつた。兄といつしよに鉄道のアノーヴァー駅に電灯があかあかともっているのを見物にいく。当時ちょうど電灯が導入されたときで、非常にめづらしがられていた。親方自身も仕事場できつしよにはたらく。もう一人、三年目の徒弟がいて合計三人が仕事をする。旋盤 (Drehbank) はまだ足踏み式だが、カッセル市のゴットハルト親方のところのものよりはるかによくできている。踏板 (Trittbrett) もズツと力がすくなくすむように工夫されている。ここは純粹に木材だけを使って階段の横木や支柱、机や食品棚の足、鏡付き食器棚の支柱、そのほか当時家具の裝飾に使われていた部品をつくつていて、その一部は量産的な品であつた。ところでカイルは政治問題や社会問題には関係せず、どの団体にも加盟していなかつたが、ハノーヴァー市では古いツンフト法にしたがつて (nach altem Zunftrecht) ㊦ロクロ工イヌンゲ (eine Drechslerinnung) があつて、ヴィルトハーゲ親方もそれに所属していた。こうしたイヌンゲ親方 (Innungsmeister) のところではたらいっている職人は、規約によつて自然にこのイヌンゲの職人委員会 (der Gesellenausschuss) のメンバーになる。だからカイル

もそうなっていた。四週間毎にひらかれる職人委員会にカイルも二、三回出席したが、精神的には何も得るところがない。まず自分のコップのビールを飲むと、長靴の形につくった大ジョッキが食卓に出て、ビールの廻し飲みがはじまり、飲めるものはたくさん飲むが、勘定は割り勘だ。酒によわいカイルはもちろん勘定のぶんほど飲めないし、それはよいとしても廻し飲みを好まない。こうしたイヌングの職人委員会のほかに、ハノーヴァーにはすでに「ドイツ・ロクロ工労働組合」(die Vereinigung der Drechsler Deutschlands)の支部があった。ちょうど五月にこの組合は組合長(der Vorsitzende)たるカール・レーギエン(Karl Legien)の講演会をもよおした。もちろん組合加入をすすめるためだから、カイルたち職人委員会のメンバーも招待された。講演のテーマは「組織の目的と効用」で、二七才のレーギエンは一時間半にわたって流暢に、しかも内容のしつかりした話をした。かれは肩はばの広い、精力的な顔つきをした西プロイセン人で、かれが社会民主党員であることもよく知られていたが、このときは用心して政治的発言をせず、ロクロ工の長い労働時間や出来高払いの労働(Akkordarbeit)当時「殺人労働」Mordarbeitと呼ばれていた(からくるいろいろな障害、賃金の不十分さ、親方のところにまかない付きで住込むことからくる従属性などを指摘し、結論としてロクロ工がすべてこの組合に加入し、団結してこのような弊害をとり除かねばならない、と説いた。レーギエンという人物は感情よりもむしろ悟性にうったえていく性質なので、このときの講演もそうした傾向のものであったが、カイルは感激した。教会の説教のほかに講演らしいものを聞いたことがなかったせいでもあろうが、「この種の講演はわたしに全く新しい視界をひらいてくれた」とカイルは書いている。レーギエンのいったことはみんな、かれには全く理の当然のことだと思われた。かれはすぐ加入手続きをとった。

これからカイルはロクロ工労働組合のメンバーとして組合費を払い、組合の機関紙「ロクロ工専門新聞」(Drechslerfachzeitung)を受取った。これは週刊だが、そこにはレーギエンが講演したのと同じ考え方が述べられていた。そのほか

に新聞を通じて全ドイツの諸支部の精神生活をうかがうことができた。国内のあらゆる地方から寄せられた組合員集会の報告が掲載されているからである。それらの集会では組織問題が論じられ、ロクロ工経営内のもうものの弊害が手きびしく非難され、またいろいろな講演が催されていた。批判が鋭くなつてストの準備に言及している地域もある。じつさいにストになると、鬭争地域にスト破りの労働力を与えないために、そこへいくのを差控えるようにという要請が全ドイツの同僚に向けて発せられる。スト中の仲間には組合から生活扶助金が与えられる。もちろんその額は賃金の一部にしか相当しない。組合はそのほかに遍歴中の組合員に旅行扶助金を与える。その額は、なにしろこの組合運動がまだ初期の段階のことだから、それぞれの支部の能力に応じて決められることになつていた。なお機関紙には付録としてロクロ工の製作品について立派な図が掲載されていた。週一回刊行されるこの機関紙を、カイルは一行も残さず精読したと記している。ハノーヴァーに在るうちに、カイルはもう一回この労働組合の支部集會に参加したが、ここではツンフト制のイヌングの職人委員会よりもはるかに得るところが多かつた。ビールの廻し飲みなどはなく、実質的な討論がおこなわれた。幾人かの指導的同僚は、整然たる発言で自分のいわんとするところをハッキリ表現することができた。議長がいて、討論が議會的秩序のうちに進行するように心がけた。こうした一切のことはカイルにとつて、職人委員会のやりとりよりもはるかに好ましいことだったので、かれはもはやこの委員会には全く興味を失つてしまつた。カイルのほかに、職人委員会のメンバーでカイルと同じ心境になつたものが二、三人いた。そこでかれらは親方に、今後は委員会に一切会費を払わないと宣告した。しかし親方たちは、イヌング規約にお前たちは拘束されているから、勝手に脱退することはできないと主張した。こうした意見の対立から紛争が生じて、それが長びいて解決しないうちに、カイルは六月の末に再びワタリの旅に出た。ハノーヴァーにはちようど四カ月滞在したわけである。ヴィルトハーゲ親方のところでは週給一三マルクだつたら、室料・食費を週六マルクで済ませ、雑費を週一マルク以下に切りつめて、すくなくとも週六マルクは貯金することが



できた。ハノーヴァー生まれでカイルと同じ年ごろのロクロ工と二人づれで、遍歴の旅に出たが、途中でロクロ工親方の家を見つけて「フォールシュプレッヘン」(vorsprechen 立寄り)する。これは一種の仁義で、親方だけいれば親方だけに、もし職人もいれば親方と職人と呼びかける。「今日は、親方と職人さん。旅のロクロ工が仕事をさがしてお立寄りしてします」(„Grüss Gott, Meister und Gesellen! Ein fremder Drechsler spricht um Arbeit vor.“)呼びかけられたものはツンフトの慣習にしたがって答える。「よく来た、ロクロ工」(„Hui Drechsler!“)と。この呼びかけのなかには、仕事があるかという問いが含まれているから、親方はすぐ仕事の有無を答える。このときの親方は、予想どおり、「仕事はない」と答えたが、ツンフトの慣習による「祝儀」(„Geschenk“)として、めいめいに一〇プフェニヒづつくれた。これで「フォールシュプレッヘン」の目的は達したわけだ。そののち着いたフェルデン (Verden) は小さい町なのに、ロクロ工親方が六人もいたので、順々に「フォールシュプレッヘン」して一〇プフェニヒづつもらった。ブレーメン市をめざしていく途中の村々でも独立のロクロ工を見つけると、かならず「フォールシュプレッヘン」したが、なかには五プフェニヒづつしかくれない親方もあったけれど、全然くれないものは一人もなかった。

ブレーメン市に入ると、とりあえずロクロ工交際室 (das Verkehrslokal der Drechsler) に荷物をあずけて市内見物に出かけた。この都市で職をさがしたが見つからないので、ロクロ工労働組合支部にいった一人につき六〇プフェニヒづつの旅行扶助をもらい、ハンブルク市へ出発する。途中ハルブルク (Harburg) 市でも仕事をさがして得ず、その支部で三〇プフェニヒづつの扶助をもらう。同市に一泊して翌朝カイルたちは「ハルブルク・ステッキ工場」(die Harburger Stockfabrik) に「立寄り」をした。ここにはロクロ工労働組の仲間が多数 (die Mehrzahl) やとわれていたからだ。だが職はなく、その仲間たちが集って贈ってくれたカネが一人に六五プフェニヒづつになった。ここから水路でハンブルク市に着く。当時のハンブルクは人口五〇万。ロクロ工労働支部で旅行扶助をもらい、それからロクロ工イヌン

グ (Drechslerinnung) の職業紹介部 (Arbeitsnachweis) を訪ねた。こゝで四つの仕事場が職人を求めていることがわかった。いちばん近いところにいる親方のところに行く、二人とも採用されて翌日からはたらく。二人で室をさがして二つベッドのある一室を借りてそこにいっしょに住む。室料は朝の茶と少量のパン、夜の茶付きで週各人ニマルク五〇プフェニツヒづつ。この親方の仕事場では上等の家具の付属品だけを専門的につくっていた。一週間後に週給一七マルクづつもらう。カイルはこの賃金に不満であり、親方もカイルの仕事に不満なので、すぐやめた。翌日カイルは職業紹介部でジツヘルカという親方が職人を求めているのを知って、そこへ出かける。ここでは黒檀製のドア把手 (Türdrücker) をつくっていた。採用されるが、仕事場には旋盤が三台あったけれど、労働者はカイルただ一人だった。つぎの土曜の賃金決定日には五日間の労働にたいして一七マルクくれたが、親方は雇用継続を望まない。職業紹介部でローデ (Rohde) という親方の求人を知る。かれは狭い住居のなかにかなり大きな一室を仕事場にしつらえていた。そこに二人の職人と親方とはたらくのだが、親方は仲介親方 (Zwischennmeister) で、ハンブルクにはこうした「仲介親方」が多数いた。だからローデ親方もガッチリはたらく。かれは当時流行の婦人用傘の角 (ツノ) 製の把手だけをつくっていた。材料の野牛の角は問屋 (der Grossist) が供給し、でもあがつた把手は、また問屋に引渡される。だから親方 (Meister) といつても、本質的には、やはり職人 (Geelle) にすぎないわけである。親方は三〇才代のひとだったが、仕事場ではカイルのほかに、数日前にやとわれたばかりの五〇才をこえた職人がいた。この人は、はたらいた期間より遍歴した期間のほうが長いという全くのワタリ職人で、大の酒好きだった。親方も酒好きだから、二人でよく飲んだ。やがてアンブレラーの把手の大量生産にカイルも慣れた。出来高払いだだったので、第一週は五日間で一一マルクしかかせげなかったが、第二週には一五マルク、第三週一八マルク、のちには最高二ニマルクまでいった。仕事場に話がはずんで、政治のことにも及んだが、カイルは聞き役にとどまった。カイルがハンブルクに来てはどなく、ロクロ工のストライキが起つた。要求は一時間につき三

五プフェニツヒの賃金と一〇時間労働とであった。しかし、カイルたちは一日の平均労働時間が一〇時間を超えず、それも自分で決めてよいのだし、賃金は出来高払いなので、ストには関係がないと考えた。それでもロクロ工労組の組合員として、カイルはストについての二、三の集会に出席した。ここでカイルはテオドル・ライパルト (Theodor Leipart) という二一才のロクロ工を識る。かれは丈の高い、金髪の若者で、しばしば発言したが、自分の意見を非常に考え深い明瞭なことで静かに述べた。ハンブルクは組合本部の所在地なので、組合長のカール・レーギエンの演説もカイルはふたたび聞くことができた。しかし、当時は組合の役員も機関紙の編集者も専従ではなく、職業のかたわらになされていた。レーギエンはローデ親方のような「仲介親方」、すなわち問屋と職人との仲介者で自分自身も本質的には職人にすぎない親方のところに雇われていたのである。ストは二、三週間のちにささやかな部分的成果をおさめて終った。

そのちカイルはロンドンに渡ったが、仕事がないのでドイツに帰り、ライン河畔のケルン (Köln) にやってくる。まずロクロ工のヘルベルゲ (die Herberge) をたずねる。ヘルベルゲはツンフト制の伝統によるイヌングの会合所である。ここで調べて、ロクロイヌングの長老 (der Obermeister der Drechslerinnung) でシュテックル (Stöckle) という親方のところで週一八マルクではたらくことになった。この親方は七〇才で、非常に気立てのいい人だったが、八週間すると仕事がなくなったのでカイルはこの親方のもとを去る。注文が親方の息子と徒弟と二人ぶんの仕事にも足りなかつたからだ。この息子は三五才ほどの既婚者で、「自分は社会民主党系の秘密団体 (die geheime sozialdemokratische Verbindung) のメンバーである」と用心しながらカイルに語った。かれはドイツ社会民主党の公式の機関紙「ツィアールデモクラート」の購読者でもあつた。これはチューリツヒで印刷されていて、ドイツでは禁止されているので、購読者の手には秘密でしか渡らないわけである。かれはカイルに二、三号ぶんを読ませてくれたが、カイルの当時の政治的理解力では内容を評価できなかつた。それに反して通俗的週刊紙として発行されていた「ケルン労働者新聞」(„Kölnener Arbeiter-

zeitung“)のほうは、いくらか有益に読めた。これは社会民主党の立場に立っているが、発行禁止にならないように用心して、公然と社会民主党系の週刊紙たることを表明するのを避けていた。カイルは親方の息子にすめられてその予約購読者になった。手工業の親方とその息子が社会民主党に所属することは、当時としては稀れでなかったし、たとえばアウグスト・ベーベルもかつてはロクロ工の小親方だった、とカイルは述べている。シュテックレ親方のところを出ると、すぐシュニツクマン(Schnickmann)という親方のところに職があった。ここでは約一〇人の職人が目分量で癒瘡木(Pockholz)製の小球を週に何千とつくっていた。カイルは週一八マルクをもらい、またしばしば残業が必要で、そのばあいには一時間につき三五プフェニツヒになった。ロクロ工労組ケルン支部の或る夜の慰労会(eine Abendunterhaltung)で、カイルはパウル・ウムブライト(Paul Umbreit)という若いロクロ工を識る。かれはカイルより二才年長でライプツィヒ生れで、ケルンのステッキ工場(die Stockfabrik)ではたらいていた。父はライプツィヒでロクロ工の親方として仕事場を経営し、社会民主党員でベーベルの友人だったから、この若者はいわば乳といっしよに社会主義思想を吸収したわけだ。かれは特別の知性をそなえた人物で、かれがライプツィヒで受けた八年間の学校教育はかれに非常に役立つていた。すでに一年前からロクロ工労組に入っていて、ケルン支部では同僚のあいだに或る程度の信頼をえていた。それに比べるとカイルは社会主義思想についてホンのわずかし知らなかった。識り合いになって数日後に、カイルは二人で「福音主義青年会」(der Evangelische Junglingsverein)に入会しようとウムブライトに提案した。するとウムブライトは、「宗教とキリスト教にかんする自分の見解をくわしく述べ、これらの会のもつ保守反動的(Konservativ-Reaktionär)傾向をカイルに向かつて熱心に説いたので、カイルは宗教・教会・聖職者にかんする従来の考え方を改めて、この新思想に深く共鳴するようになった。二人は「支部の夕」(der Zählstellenabend)の営連で、ウムブライトは討論にも参加した。これがカイルを刺激して、カイル自身もすこしずつ発言するようになり、「ケルン労働者新聞」を熱心に読んでいるうちに、

しだいに政治への関心も生じた。日曜には二人でハイキングに出かけたが、ふだんの散歩でも活発に政治を論じ合った。そのばあいウムブライトがよい教師の役をしてくれた。かれの双生児の兄弟でエッセン市に書籍商をしていたローベルト・ウムブライトが日曜に時どきケルンに来て散歩に加わったが、このローベルトも社会主義者だった。カイルは正式に社会民主党に入党して黨員になろうとは、当時はまだ思わなかった。社会主義鎮圧法の時代だから党は秘密組織であり、よほど信用できると思われた人物しか入党させてもらえなかった。パウル・ウムブライトはそうした信用をえていた人物なので、或る日かれの紹介でカイルは秘密集會に出席できた。それは一八八九年三月一八日のことで、一八四八年の革命からちょうど四〇年経過した記念の催しであった。「ツァーア・ノイエン・ヴェルト」(“Zur neuen Welt”)というレストランの地下室の酒房(die Kellerrwirtschaft)で夜の一二時からドアを閉めて開會された。家具工(Schreiner)を職とするカール・マイスト(Karl Meist)が当時ケルンの社会民主党・国会議員候補で、そのマイストが記念の演説をした——とカイルは述べている。

## 六

カイルの自叙伝のうち本稿に関係のある年代の記述を、なるべく私見をまじえず、重要な部分ではできるだけ原文に忠実にかえりみたのであるが、それによって一八八〇年代後半のドイツ手工業界の具体的な状況がかなりよくわかる。資本主義の発展につれて「仲介親方」に転落する小親方層とその子弟および職人との関係。手工業が量産に移る過渡的段階の小経営の姿と出来高払い制の問題。若い職人活動家の行動様式。かれによって啓蒙されていく若い職人労働者の意識のゆらめきと発展の過程。ツンプト遺制としてのイマングと近代的労働組合との対立抗争。宗教と社会主義思想との関係——など、一八七〇年代および八〇年代のドイツ労働運動の構造について考えようとするものにとつて極めて興味ある多くの事

項について、示唆に富む記述が見出される。とくにケルン市におけるカイルの体験の回想から、われわれはさきにあげた「ゾツィアールデモクラート」の發送リストのなかのケルン市の一七一——一八一という購読部数の意味するものを想像する。カイルの記述がどこまで信頼できるかということは、もちろん大いに批判的な検討を加えるべきであつて一〇〇パーセント信用してかかることは危険であり、さらに重要なことを秘しているかもしれないが、まだこの若い時分のことについては格別にペンを曲げる理由もないように思われるので、だいたひ信用してよいのではないかと考える。

ピーター・ゲイの「民主主義のディレンマ」(一九五二年)はコロンビア大学出版部の刊行だが、そのなかでゲイは、ドイツ社会民主党の社会的構成 (social composition) を分析するためには、まず二つのグループを注意ぶかく区別することが必要だという。正式の黨員と、選挙のときにドイツ社会民主党に投票する非黨員とがそれである。なぜなら、この二つのグループをいっしょにしたものがドイツ社会民主党と呼ばれるものを形成しているからだ。二グループを区別したからといって、それだけ分析の仕事が楽になるわけではないが、それでも区別することは大事である、とゲイはいう。なおドイツ社会民主党の黨員は、一八七五年に二五、六五九名、一九〇六年に三八四、三二七名といわれているが、その中間の黨員数は知られていない。黨員と非黨員投票者との数的関係は一八七〇年代および八〇年代のくわしいことはわからない<sup>(9)</sup>。さきに述べた一八八七年における「ゾツィアールデモクラート」の購読者数は期によつてちがうが、およそ一万部である。これをほぼ当時の黨員数に近いと見ると、同年の総選挙でドイツ社会民主党はおよそ七六三、〇〇〇票をとっているから、両者のおよその数的関係がわかる。(因みに一八九〇年の総選挙における社会民主党の得票数は一、四二七、三〇〇) ついでに一八七八年から九〇年までのドイツ国内の労働組合員の数を見ると、ヨーゼフ・クルトは「ドイツ労働組合史」(一九五八年改訂再版)で、一八七八年四九、〇五五人としている。これは一二七六地域の合計だということから、なかには一人で二つ以上の労組に重複して数えられているものもあるかもしれない。とにかくクルトによると、こ

の数は一〇年前の組合員数一四二、〇〇〇人に比べると格段の差で、この減少はラッサール派とアイゼナツハ派との争いの結果だという。なおクルトは一八八〇年代および一八九〇年のドイツ労働組合員の数をつぎのようにあげている。<sup>10)</sup>

一八八六年	八一、二〇〇	一八八九年	一二一、六四七
一八八八年	八九、七〇〇	一八九〇年	三二〇、〇〇〇

これによると、一八八七年の労働組合員数は八五、〇〇〇人くらいということになりそうだ。だから一八八七年には、「ゾツィアールデモクラート」の購読者数が約一万、労働組合員数およそ八五、〇〇〇、社会民主党の得票七六三、〇〇〇ということになる。

それでは一八七〇年代および八〇年代のドイツ労働運動で、どんな職種が最も積極的に活動しているか。東ドイツで「ドイツ労働運動史の文書探求」双書の第三巻として発行された「一八七八—一八九〇年社会主義鎮庄法時代のドイツ社会民主党の闘争」（一九五六年刊）は「ライヒス・コミッシオン（帝国委員会）の活動」という副題に示されているように、鎮庄法にもとづいて解散を命じられた団体が異議を申立てたものについて同委員会の査定報告を中心とする文書資料と解説とから成る興味ふかい労作である。それによると、フランクフルト・アム・マイン市の一八八九年における「労働者選挙同盟」(Arbeiterwahlverein)の文書に出てくる活動家の人名と職種はつぎのようである。(因みに同市の「ゾツィアールデモクラート」購読者数は一八八七年三二〇—二〇〇)

J・シュミット	仕立工	L・エンメル	錠前工 (Schlosser)
M・フィッシャー	靴工	E・スルンツ	家具工
F・レンチュ	靴工		

ケーニヒスベルク市における一八八六年の「呼びかけ」は社会民主党系の宣伝ビラだが、その呼びかけられた職種は、

やはり労働運動および社会主義運動にたいする受容性の高い職種であったと考えられる。<sup>(12)</sup>

(同市の「ゾツィアールデモクラート」購読者数一八八七年一〇一〇〇)

a、ケーニヒスベルクの左官へ (An die Maurer Königsbergs i)

b、ケーニヒスベルクの大工へ (An die Zimmerer Königsbergs i)

c、ケーニヒスベルクのあらゆる部門の金属労働者へ (An die Metallarbeiter aller Branchen Königsbergs i)

d、ケーニヒスベルクの仕立工へ (An die Schneider Königsbergs i)

ミュンヘン市(「ゾツィアールデモクラート」購読数一八八七年一〇〇—九〇)における一八八七年の「ミュンヘンおよび周辺のための衛生同盟」にかんする文書に出てくる活動家の名と職種はつぎのようになっていいる。(因みにこの同盟のメンバーは四、〇〇〇人とある。)

ウルバン 鋳掛工 (Spengler)

プファイファー 家具工

ブラント 鋳前工

ホイヒレ 家具工

ドーブマイヤー 鋳前工

ゲルストマイヤー 書籍行商人

ラインフェルダー 靴工、書籍行商人 (Kopporteur)

ヴェークホフファー 仕立工

右のほかに編集人レーベンベルク、アナーキストラしき人物シュレック、主発起人エミール・ダクセルの三人の名が出ているが、職種不明。<sup>(13)</sup>

ブレスラウ市(「ゾツィアールデモクラート」購読数一八八七年八〇—五四)の一八八五年における「図書印刷出版業シレジア・W・クーネルト会社経営同盟」文書に出てくる活動家の名と職種。<sup>(14)</sup>

カール・ユスト

仕立工職人 (Schneidergeselle)

パンターバー 左官 (Maurer)

ヴェイントホルスト

葉巻工 (Zigarrenarbeiter)

ヴィルヘルム・シュテルマー 左官職人 (Maurergeselle)

一八七〇年代および八〇年代のドイツ労働運動の構造



ドルトムント市(「ゾツィアールデモクラート購読一八八七年二九——二七」および周辺の一八七八年における「社会民主党労働者選挙同盟」(Sozialdemokratischer Arbeiterwahlverein für die Stadt und den Landkreis Dortmund) 関係の文書に見ゆる活動家の名と職種。

クール	革紐工 (Riemer)	カルプフライシユ	仕立工
ヘーデル	ブリキ工 (Klempner)	シュレーダー	(もと鋳夫) 靴工
ベンシユ	仕立工親方 (Schneidermeister)	テンホーフ	鋳夫 (Bergmann)

この同盟の会長は仕立工親方ベンシユで、同盟員二九九名とある。<sup>(15)</sup> なおこの文書には一八七四年いろいろのベルリンにおける社会主義的労働組合としてつぎのものをおあげている。<sup>(16)</sup>

全ドイツ左官・石工組合 (der Allgemeine Deutsche Maurer- und Steinhauerbund)  
ドイツ大工組合 (der Deutsche Zimmerbund)  
全ドイツ靴工組合 (der Allgemeine Deutsche Schuhmacherverein)  
ベルリン研磨工組合 (der Berliner Putzerklub)  
鞍工組合 (der Verein der Sattler und Berufsgenossen)

一八八六年のベルリン市における「労働者選挙区同盟ウンフェルツァークト」(Arbeiter-Bezirksverein Unverzagt) の文書に見える活動家の名と職種<sup>(17)</sup>。

クロイツ	指物工	ゲリッシェ	錠前工
シュタインドルフ	鞍工		

デュッセルドルフ市(「ゾツィアールデモクラート購読一八八七年二八——二六」の一八八九年における労働組合で委員

会の調査の対象となつたのも、家具工、指物工、靴工の労組である。<sup>(18)</sup>

以上のデータのみによつて全般を律することは危険であるが、いかなる職種のものが活動的であるかについて、およその見当はつくように思われる。ただし、これは単に職種名だけであつて、それがいかなる規模と形態の企業のもとにはたらいっている労働者であつたかがわからないのは残念の極みである。上記のうちに錠前工の名が四人出ているが、それだけでは小親方のところにはたらいっているのか、工場に勤めているのか、工場といつてもどの程度の大きさの工場かはわからない。アネマリー・ランゲの「ペーベルおよびビスマルクの時代のベルリン」によると、一八七八年六月に国営の「ケーニヒリッヘ・オストバーン」(Kgl. Ostbahn)は錠前工ヴィルヘルム・ゲルトナー(Wilhelm Gärtner)を免職している。このころ企業家たちは自分の企業のなかに社会民主党の勢力がのびてくるのを非常に恐れた。「ベルリン使用者連盟」(„Verband Berliner Arbeitgeber“)は、「職場の内部および外部において」社会主義の宣伝をおこなうすべての労働者を免職することを決議した。「ベルリーナー・フライエ・プレッセ」紙はこの決議に加つた企業家の名をあげているが、大きな機械製造株式会社(Maschinenbau-Aktiengesellschaft)はすべてこれに参加していた。上記のケーニヒリッヘ・オストバーン社もこの決議にもとづいてゲルトナーをその社会民主主義的扇動のゆえに免職処分にしたのである。このときの史料(免職証書)があるので、この錠前工の勤めていた企業の規模がおよそわかる。しかし、そのほかの錠前工については詳しいことはわからない。なお同書によると、一八八九年第二インターへのベルリン代表に選ばれた人たちの職業は、金属工(Metalarbeiter)、鋳型工(Former)、指物工、左官、大工、仕立工、家僕(Hausdiener)となつてゐる。<sup>(19)</sup>

以上によつても大工・左官などの建築関係の職種に活動家の多かつたことがわかる。さきに参照した「一八七八——一八九〇年社会主義鎮任法時代のドイツ社会民主党の闘争」には、一八八七年の「ベルリン大工賃金委員会」(Lohnkommission der Berliner Zimmerer)の訴願にかんする審査記録がある。そのなかに「ドイツの全建築労働者(とくに左官・

陶工・大工・指物工・石工」(die gesamte Bauarbeiterschaft Deutschlands (insbesondere Maurer, Töpfer, Zimmer, Tischler, Steinmetz)) という表現がある。左官・大工・石工が建築労働者に属することは今ならいまでもないが、陶工を入れていることは、建築労働者のなかで忘れられがちなものだけに、興味ふかい。この式でいくと、指物工のほかに家具工やロクロ工が入るだろう。画工 (Maler)・塗装工 (Lackierer)・室内装飾工 (Tapezierer) なども入るかもしれない。いずれにしてもこの文書によると——賃金委員会は一八八四年四月に創立されて七人のメンバーから成る。このメンバーは定期 (おおむね年一回) の改選ならびに補欠選挙によって選任されるもので、ベルリンならびに全ドイツの大工たちの労働条件を高めることを本来の目的とし、とくに九時間労働と一時間五〇プフェニヒの最低賃金制定とを目ざしていた。この史料集の編者が中略の部分について加えた注記によると、一八八七年に委員だった七人は、ザイツト (Seitz)・レーマン (Lehmann)・ヘルスホルツ (Eisholz)・ヒンツェ (Hinze)・クレム (Klemm)・ルードルフ (Rudolph)・マイスナー (Meissner) で、以上のうちルードルフまでは社会民主党の活動家だと文書に記されているようである。この人びとは、扇動者 (Agitator) としてひろく知られている建築親方ケスラー (Baumeister Kessler) の指導のもとにベルリンおよび全ドイツの建築労働者のあいだに社会主義的指導をおこない、また社会民主党の指導部と多少とも密接な関係をもっている。たとえばレーマン、ザイツト、ヒンツェ、マイスナーは社会民主党の扇動者として、また禁止された印刷物の普及者として、さらに当地の秘密組織の主要人物として活動してきた。レーマンとザイツトはチューリッヒの「ゾツィアールデモクラート」の予約購読者である。レーマンはこの賃金委員会のメンバーとともに、「ドイツ大工労働組合」(Verband Deutscher Zimmerleute) の当地における指導部があくまで合法的なワクのなかにとどまろうとするのを不満とし、この指導部を粉砕せんとしていた。ドイツ大工労組は一八八三年秋に当地で設立されて、当時八四支部、組員五、六〇〇人であった——という。以下、この文書にはなおくわしく賃金委員会の活動ぶりが記述されており、社

会民主党系の活動家として左官ベレント(Behrend)・左官ヴァルケ(Wilke)・陶工ブルツィットツキー(Przytulski)などもあげられている。<sup>(20)</sup>

同じライヒス・コミッション文書のなかに、一八八四年の「ベルリンおよび周辺の左官へ」という呼びかけについての審査がある。これは「ベルリン左官組合」(Verein zur Wahrung der Interessen der Berliner Maurer)が出した呼びかけで、この組合は合法的な方法と手段で左官の状態を改善し、労働時間を適正にし、賃金を高め、職場たる建築現場において上位者から人間らしく取扱つてもらふよう要求しようとしている。審査委員会は以上のことを認め、この組合はとくに、「建築業の搾取者・テキ屋・ヤマ師およびペテン師」(Ausbeuter, Puschler, Bauspekulanten, und Schwindler des Baugewerbes)がポリール(Polier)すなわち大工・左官の頭(かしら)たちの中間搾取を許してきなきだに乏しい賃金をいっそう低下させ、労働時間を延長させて日曜・祭日までもはたらかせたりすることを当面最大の問題点として、それらのことをやめさせようとしているのだと述べている。<sup>(21)</sup> 一九〇四年のハンブルクのメー・デーにおいても、その第一線に立つて示威行進をした職種のうち建築工がいた事実を考えると、上記のことはいっそう興味ふかい。とくに建築業においては中間搾取がはげしいことも、建築労働者の長い組織的伝統とともに、かれらを労働運動の活動的職種にした要因であろう。アネマリー・ランゲの「ベールおよびビスマルク時代のベルリン」を見ても、一八八九年のストライキ続出の状況のなかではあるが、左官は九時間労働と一時間六〇プフェニツヒの要求をかかげて何カ月にもわたる闘争をおこない、雇主たちはそれらの要求を大部分承認せざるをえなかつたことがわかる。<sup>(22)</sup>

陶工の活動家については、くわしいことがわからない。ライヒス・コミッションの文書に「左官および陶工の諸組織」(die Maurer- und Töpferorganisationen)とどう表現が見えるので、<sup>(23)</sup> 左官と近い関係にあると思われる。指物工の活動家については、同じライヒス・コミッションの文書集に多くの事例があげられており、<sup>(24)</sup> 家具工(Schreiner)につ

いても同様である。<sup>(25)</sup>画工、塗装工のことも同文書集に記載があるが、ここでは詳述を差控える。<sup>(26)</sup>

註(1)「史淵」八六輯(昭三六・一二)拙稿「一八七〇年代および八〇年代のドイツ労働運動の構造」(上)、五—九ページ参照。Engelberg, Ernst: *Revolutionäre Politik und Rote Feldpost, 1878—1890.* Akademie-Verlag, 1959. S. 283—291.

(2) Engelberg, S. 189—190. ルール地方でドイツ社会民主党は一八八七年にはまだほとんど重きをなせず、一八九〇年にはじめて云うに足るほどの票をとった。とゲルハルト・A・リッターは「ヴィルヘルム帝国の労働運動」のなかに書いている。クルップの本拠で住民の六〇・七パーセントがカトリックであるエッセンでは、一八八七年に社会民主党が得た票数は全体の一・三パーセントにすぎなかったが、一八九〇年には九・四パーセントをこえた。Duisburg-Mühlheim-Ruhrort 区は五〇・七パーセントがカトリックだが、一八八七年三・三パーセントしかとれなかったのに一八九〇年には九・四パーセント。Bochum-Gelsenkirchen-Hattingen 区はカトリック四五・三パーセントで、一八八七年二・一パーセント、一八九〇年一五・〇パーセント。Dortmund-Hörde 区はカトリック四二・六パーセントで、一八八七年五・七パーセント、一八九〇年二六・七パーセントとなっている。Ritter, Gerhard A.: *Die Arbeiterbewegung im Wilhelminischen Reich.* Collo-

quium Verlag, 1959. S. 70.

(3) 「史淵」八六輯 二—三ページ。

(4) Engelberg, S. 284—291.

(5) *Grundriss der Sozialökonomik. K. Abteilung, I. Teil.* (Goetz Briefs: Das gewerbliche Proletariat) Verlag von J. C. B. Mohr. S. 220—222.

(6) Ritter, S. 110—111. 一九〇四年の社会民主党大会プログラムの中の或る代議員は「大工業 (die Grossindustrie) では、仕事を休んでメー・デーを祝うとどうようなことは、まったく話題にもならない。ハンブルクでは三万の労働者がメー・デーを祝ったといわれている。しかし、組織に入っている金属労働者七千名のうち、たった三〇〇名が参加したにすぎぬ。その三〇〇名は小工業家のところに (bei Kleinindustriellen) なたらういった人びとである」と語っている。(Protokoll, S. 279.)

(7) Keil, Wilhelm: *Erlebnisse eines Sozialdemokraten.*

I. Band. Deutsche Verlags-Anstalt, 1947. S. 15—72.

(8) Gay, Peter: *The Dilemma of Democratic Socialism.* Edward Bernsteins Challenge to Marx. Columbia University Press, 1952. p. 106.

(9) 一九〇三年の総選挙でドイツ社会民主党のヘルリンがその周辺における黨員数三六、五一三名にたうして、マイ

社会民主党に投票したものが三三〇、四五六名。したがって  
議員数は投票者数の二パーセントほどである。°Gay, p. 106.

- ⑧ Kurth, Josef : Geschichte der Gewerkschaften in Deutschland. Norddeutsche Verlagsanstalt O. Goedel, 1958. S. 57.

- ⑨ Stern, Leo (Hrsg.) : Der Kampf der Deutschen Sozialdemokratie in der Zeit des Sozialistengesetzes 1878—1890. Die Tätigkeit der Reichs-Commission. (Archivalische Forschungen zur Geschichte der deutschen Arbeiterbewegung. Band 3/1, 3/2) Rütten und Loening, 1956. (ズレRCニ監ヤ) S. 974.

- ⑩ RC, S. 575.  
⑪ RC, S. 906.  
⑫ RC, S. 843.  
⑬ RC, S. 701—710. この社立工親方が仲介親方か否か

は不詳。

- ⑭ RC, S. 701.  
⑮ RC, S. 873—875.  
⑯ RC, S. 967.  
⑰ Lange, Annemarie : Berlin zur Zeit Babels und Bismarcks. Das neue Berlin, 1959. S. 211—212, 332.  
⑱ RC, S. 916—926.  
⑲ RC, S. 571—572.  
⑳ Lange, S. 332.  
㉑ RC, S. 918.  
㉒ RC, S. 47, 126, 229, 246, 575, 583, 663, 669, 685, 755, 781, 825, 915, 927, 933, 945, 978, 1010.  
㉓ RC, S. 904, 908, 911, 968, 1010.  
㉔ RC, S. 12, 22, 160, 280, 289, 292, 673—679, 684, 890—899, 952.

## **Die Struktur der deutschen Arbeiterbewegung in den siebziger und achtziger Jahren des 19. Jahrhunderts. (II)**

von Eizaburo KOBAYASHI

Über die Lage der organisierten Arbeiter um 1890 schreibt Gerhard A. Ritter in seinem Buch („Die Arbeiterbewegung im Wilhelminischen Reich“. Berlin, 1959): Neben den qualifizierten Spezialarbeiter lag das Schwergewicht der Gewerkschaften 1890 bei den Gesellen handwerklicher Betriebe und vor allem in den Fabriken der Leichtindustrie und der Fertigwarenindustrie, soweit dort gelernte Arbeiter beschäftigt werden. (.....) Besonders schwierig erwies sich die gewerkschaftliche Organisation der Arbeiter in den Grossbetrieben der Schwerindustrie“. Auch Ernst Engelberg betont die ähnliche Auffassung. (Cf. sein Buch: „Revolutionäre Politik und Rote Feldpost“. Berlin, 1959.) Aber solche Auffassung darf nicht allzu betont werden. Denn auch die Arbeiter der Grossbetriebe waren nicht ganz untätig.

Auf dem Parteitag der Sozialdemokratie 1904 sagte ein Hamburger Delegierter: „In der Grossindustrie ist von einer Feier des I. Mai durch Arbeitsruhe gar keine Rede. Da heisst es in Hamburg haben 30,000 Arbeiter den I. Mai gefeiert. Aber von den 7,000 organisierten Metallarbeitern waren nur 300 beteiligt. Die Demonstranten sind in erster Linie die Bauhandwerker, Schuhmacher, Schneider, Gastwirte, Angestellte der Krankenkassen usw. Aber im Hafen wird weiter gearbeitet und ebenso in der Metallindustrie. Die feiernden Metallarbeiter arbeiten bei Kleinindustriellen“. (Protokoll, S. 279) Dies können wir auch durch die Selbstbiographie von Wilhelm Keil („Erlebnisse eines Sozialdemokraten“) bestätigen. Da finden wir in den achtziger Jahren „Zwischenmeister“ (welche im Grund schon nur Lohnarbeiter sind), Akkordarbeit, junge Gesellenor-

organisatoren, Innung als die Überreste der Zunftverfassung. Peter Gay (in seinem Buch : „ The Dilemma of Democratic Socialism“. N. Y. 1952) sagt, dass wenn man „ the social composition“ der Sozialdemokratie analysieren will, man achtsam die Parteimitglieder von den Nichtparteimitgliedern, die bei den Wahlen für die sozialdemokratischen Kandidaten votieren, unterscheiden muss. Denn die zwei Gruppen, zusammengefügt, bilden die Sozialdemokratie.

Bei welchen Berufsarten der Arbeiter können wir die aktivsten Träger der Arbeiterbewegung? Darüber will ich die möglichst konkreten Tatsachen finden.